

ことを、総称的に「松江に行く」と称して、自らの世界と距離を置いていた。また、意識という点でいえば、農  
村部と漁村部もお互いを異世界と認識していたようである。松江市中部や南部の農村では、島根半島の漁村地帯  
を指してウラ（浦）と呼び、逆に島根半島の人たちは、農村部をジカタ（地方）と呼んで、お互いを意識してい  
たからである。たとえば大芦浜の人から見れば、講武の農村地帯は既にジカタと呼ばれていた。

## 第一節 松江市域のムラ

### 一 ムラの変遷

#### 村とムラ

農、漁村部に限れば、民俗の伝承母体となってきたのが村である。「○○地方の民俗」と称して  
みても、畢竟ひっきようそれらは、村を単位として伝承されてきたものの総体である。他方で村は、人々の  
生活の場でもあった。近年では、われわれの人間関係のネットワークは広く拡散しているが、かつて村は人々の  
唯一の生活の場であり、また、一つの閉じられた世界を成していた。時には運命共同体でもあった。日々の生活  
を営む中で人々は、村の中で互いに様々な社会関係を結び合い、さらに、そのような関係を維持していくための  
機構も工夫してきた。

本書では、このような生活共同体としての村を表記するのに片仮名のムラを用いることにしたい。というのは、  
例えば八雲村や玉湯村のような「○○村」という時の村は、行政単位を指す語でもあり、混乱を避けるためである。

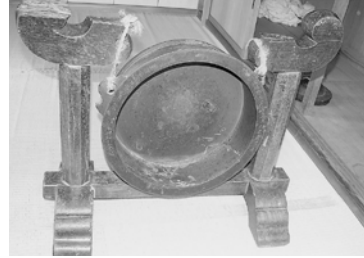


写真1-1 阿弥陀堂の双盤  
(島根町大芦海鳥 平成23年)

社会学ではこのムラを記述するのに村落という語を充てているので、本書でもこの用法は踏襲したい。他方、地理学で主として用いる集落の語は、家屋の集合という意味である。可視的で形態的な存在として村落を把握しており、必ずしも生活共同体すなわちムラと一致するわけではなく、ムラが複数の集落から形成されているというケースも多いのである。

ところで、旧島根町大芦海鳥（みどり）の阿弥陀堂に残されている寛政五年（一七九三）の双盤には、「嶋根郡大芦浦海鳥村若者寄進」の銘がある。藩政期においては、海鳥も村と呼ばれていたようである。しかし、松江市域では全般的にムラはジゲと呼ばれていた。ことに秋鹿から美保関に至る島根半島地帯では、現在でも自らのムラを指してジゲと称しているところが多い。

## ム 藩政村とムラ

今日のムラの原型は、歴史的には徳川期の藩政村にさかのぼることになる。江戸時代の初期、検地の単位として村切りが実施され、年貢村請制の結果、村に貢納の連帯責任が負わされることになった。その結果、藩政村はほぼ生活共同体に一致する規模のものとして形成された。ところが松江藩では、複数のムラ（村落）を統括させるといふ形で藩政村が広域的に編成されていた。極端な例は熊野村で、ここでは藩政村が一一の村落を含んで成立していた。全国的に見れば、このような規模の大きな藩政村は、集落的には疎塊村、散村の多い地域に共通する特徴である。

表1-1からも読み取れるように、大規模村は大庭村、東・西忌部村、大谷村等、南部農村部に広く見られる